

野の一隅に住んで都市近郊の問題に取り組む動因となっている。望むらくは、できるだけ広い視野で身近な現象を拡大し、より高次のものへと導くべく、さらに努力を重ねたいと念じている。

日 記 帳

有 末 武 夫

14才のころ(高等小学2年)冬休の宿題として、毎日日記を書くことが課せられ、休み明けの教室で、各自の書いた日記の一節を読まされたことがあった。最初に私があたって、「朝おきて、顔を洗って、ごはんを食べて、少し勉強して、……夜はかるた取りをして、寝ました。」というような内容を読み上げた。その時先生が何といったかは全然覚えていない。次にあたって子は胸を張って読んだ。

「今日、僕は友だちにうそをいってしまった。××の宮さまは、生まれてから一度もうそをいわれたことがないそうです。僕もこれからは宮さまにならって、うそをいわないと決心しました。」

実はこの通りの文章が少年倶楽部の新年号のふろくの日記帳に、記入例としてのっていたのである。昭和初期の北海道の片いなかのことで、少年倶楽部をとっている子はほとんどいなかった。私はふろくの模型ほしさに、家人に内緒で新年号だけ買ったように記憶している。それはともかくとして、先生がその子に「友だち」とは誰か、「うそ」とはどんなうそかを追求してくれたら、日記帳のうそがばれるのに、と心ひそかに期待していた。ところが先生は逆に「自分の悪かったことを正直に日記に書くことはたいへんよろしい。日記とはこういうふうを書くものです。」と賞賛した。もともと引込み思案の私は、少年倶楽部の日記の模範文に、その通りの文がのっていたことを発言する勇気はなかったが、先生のいうことも信用できないものだと思ったことは事実である。

このときのくやしさが、私に「他人に読んで聞かせる日記」ではない、「自分で読みかえす日記」を書き続けさせている、といえはオーバーだが、小学校卒業以来、大体现在まで日記は継続されている。私の日記はきわめて簡単で、毎日自分のしたことを書きつけるだけである。それだけに2年前、3年前の今日をふりかえるときにはじめて面白味をもつ。昭和13年ごろ3年連用日記をみつけて、以後これを愛用していたが、東京オリンピックの5年前に、オリンピック目標の5年連用日記というのを買った。その後は大型の日記帳の1日分を5分割して5年間使ってみた。こうすると日記を書くたびに2年前・3年前の記事が目につれて、過去を楽しむ年寄りにとって日記を書く

時はまたとない愉快な時間となったのである。

しかし3年連用も5年連用も、最初の1年目を書く時だけは、過去の記事が並記されていないので、きわめて味気ない。そこで昨年から新工夫をこらしてみた。ルーズリーフ1頁を5分割して、5年連用の日記を作った。6年目には1枚ごとに新しいルーズリーフを挿入し、左右の頁を同一の日にすれば、これで10年間は、過去の記録を見ながら、日記を楽しめるわけである。そして11年目には、最初の5年分の頁をはずして、新しいのを挿入すれば、いつでも5年ないし9年の過去を楽しめる訳である。この永久に連続する連用日記は、今年第2年目ではあるが、はたしていつまで続くことやら。

広　い　視　野　で

大和田　順　子

数年前、四国の祖谷地方に行った時のことです。祖谷地方は平家の落人の村として、山奥にひっそりと陰れて数百年来生活していた村です。当時は、土讃線池田からバスで約3時間ぐらいかかりました。現在は、経済構造の変化から過疎の村となっていることでしょう。私が訪れた時も、「若い人達が大阪などの大都会に出てしまって、村には老人ばかり残っている」と役場の人が嘆いていましたから。

さて、この村で数日過しました折に、私は村人からも、役場の人達からも、そして宿のお内儀^{かみ}からも、「この祖谷村の人達は性質が醇朴で勤勉、しかも相互扶助の精神がさかんである。たとえば村人の中に病人が出ると、畑仕事や家事の手伝いなどをして援けるし、また生活に困る者が出ると村全体で面倒をみる。まことに良い村ですよ。」と誇らかに語るのを聞かされた。私もその時は、きびしい自然を相手にして数百年の間山奥の生活を続けて来たのだから、確かにそうだろうと思った。しかし、これは必ずしもそうではないという事が知らされたのです。

それは祖谷村からの帰り途のことです。当時祖谷と池田の間は、バスが一日3往復しかしていなかったもので、いずれのバスも超満員の盛況でした。勿論私の乗ったバスも物凄く混んでいてやっと立っているような状態でした。乗客の中に東京から来た学生達のグループがいました。その中の一人がバスに酔って大分気分が悪いようでした。そのうちに彼は我慢しきれなくなってしゃがんでしまいました。けれども、誰も彼に席を譲ろうとはしません。座席を占めているのは殆んど祖谷の人